



War Cry

10月号

福音版
2025
October
No.2895

二〇二五年 十月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

GOOD NEWS
とぎのこえその違いが、愛を育てる
受け入れることから始まる豊かな人生

山谷 真

私たちが暮らす世界は、多様な人々で満ちています。家族や友人、職場の同僚、地域の人々——誰一人として同じ人はいません。顔つきや声の調子、物事の考え方や感じ方、どれをとっても異なっています。

こうした「違い」は、ときに戸惑いや摩擦を引き起こします。自分と価値観や行動の仕方が合わない人とは、距離をとりたくなりまします。しかし、もし違いを排除してしまえば、私たちの世界は平板なものになってしまうでしょう。私たちはここで疑問を抱きます。なぜ神様は、人間をこれほど多様な存在として造られたのでしょうか？

三位一体が示す愛のあり方

聖書の世界観によれば、神様は、父と子と聖霊として互いに異なる存在でありながら、完全な一体性のうちにあります。これが三位一体の神です。三位一体とは、お互いの間の差異を否

定せずに、そのまま抱きしめながら、自らを相手に与えようとする動きです。そして、このような三位一体に似せて人間は造られた、と聖書は言います。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。』」（創世記1章26節）

神の愛においては、お互いの間の差異は、排除されるべき、あるいは、解消されるべき差異として現れるのではなく、むしろ、差異が愛の余白として機能しているのです。もし差異がなく、完全に同じであれば、愛は単なる自己愛に過ぎなくなってしまうでしょう。鏡に映っている自分を愛しているのと変わりがありません。しかし、お互いの間に差異があればこそ、真の関係性が生まれ、愛は力となるのです。

現実生きる愛の実践

とはいえ、このような愛を現実の人間関係で実践するのは容易ではありません。意見が対立したり、価値観がぶつかったりすると、私たちは相手を理解できずに困惑し、相手の欠点ばかりに目を向けてしまいます。しかし、神の愛に与るとは、自分とは差異がある相手を

尊重することを、あえて選び続ける、ということです。

日々の十字架を背負う

イエスは言われました。

「日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（ルカによる福音書9章23節）

十字架は、単に苦しみの象徴ではありません。それは、相手を自分の思いどおりに変えようとする欲求を脇に置くために、自分の自己中心性を手放すという決断の印です。相手の存在そのものを受け入れ尊重する、その姿勢が、日々の十字架を背負う生き方なのです。

愛の無限の広がり

私たち一人ひとりが、愛の広がり、の担い手となることができます。愛は静かに人の心を変え、家庭を変え、社会を変えていきます。今日の自分の小さな忍耐と優しさが、明日の世界の未来を形づくることを、忘れてはいけません。その歩みは、やがて美しい結実となって現れるのです。お互いの間の差異を通して現される愛だけが、新しい世界を生み出すことができるのです。それは、私たち一人ひとりの決断にかかっています。

(救世軍士官(伝道者))

「変わり者」牧師の信仰と人生、そして日本語教室



教会と日本語教室の案内



グッドニュース・バプテスト教会
(アメリカ・フロリダ州)

ミッションパスター
杉下 眞さん



日本語教室の生徒たちと

日本語教室のこと

日本からアメリカへ渡り、牧師となった杉下さん。いま、フロリダの教会で日本語教室を開いています。だれでもあたたかく招き、共に学び、ゆつくりと話をする——日本語の学びだけにとどまらない、イエス様にある交流の場となっています。

私はアメリカ・フロリダのジャクソンビル市のバプテスト教会で、ミッションパスター(教会の宣教活動を担当する牧師)をしながら日本語教室を開いています。もともとこの教室を始めたのは、コロナの時期に人々が孤独になってしまったのを見て、何かできないかと思ったからです。コロナの時

は日本も大変だったでしょうが、アメリカも同じでした。特に独身の人たちは、誰とも話せず、家でも外でも孤立してしまふ。そんな人たちが集まれる場所をつくりたかったんです。

教室の目的は、日本語を教えることだけではありません。寂しい人たちが集まって、友達をつくり、小さなコミュニケーションを築くこと、まずそれが目的です。教会でやっているから聖書の話もしますが、教会に興味がなくとも構わない。聖書が嫌いでもいい。でも、違う背景をもつ人たちが、互いに尊重し合って友達になれば、それは素晴らしいことだと思っています。そしてイエス様を求める人が与えられたら、なおさら素晴らしいことだと思っています。

教室は無料で、週に一度、水曜日の夜に開いています。時には食事も提供しています。参加者は主に二十代の若い人で、日本のアニメや文化に興味をもっている人が多いです。参加者の入れ

替わりも多く、長く続ける人はそれほどいませんが、それでもよいと思っています。来てくれた人に少しでもイエス様のこと、福音を伝えることができれば、それが私の使命です。

授業が終わった後も、生徒たちはすぐに解散というのではなく、時には遅くまで残って話をしています。最近は、私が不在の時でも、生徒が自主的に教室を運営してくれるほど、コミュニケーションとしての絆が強くなっています、それは何よりうれしいことです。感謝祭や新年会には四十人以上が集まることもあり、私の家で開催することもあります。

日本では伝道が難しいと聞きますが、アメリカでも大変です。普段の教室には十人から十五人が来ますが、そこから教会の礼拝に参加する人は多くありません。

日本からアメリカへ

アメリカに行ったのは二十六歳の時です。出身は岐阜の神岡で、父は若い頃、アメリカ人宣教師と働いていた信徒でした。私は日本という国に対して、子どもの頃から複雑な思いをもっていました。田舎でクリスチ

ヤンとして差別を受けた経験があり、日本人の中には、何もないのにいばっている人が多いと感じていました。日本で大学を出た後、アメリカに行きました。アメリカは「人種のるつぼ」で、人種の壁はないだろうと思っていました。でも、今度は日本人として差別を受けました。白人中心のキリスト教会では、戦争に負けた国の人間として見下されることもありました。

それでも、私は人種や立場を超えて、すべての人が尊重される社会をつくりたいと思っています。神様が造られた人間として、どんな違いがあっても、互いに敬意をもって接することが大切です。

救われたのはいつですかと言われると、私は雷に打たれたような、クリスチャンになった劇的な転機の経験はないので、なんとも答えようがないんです。生い立ちも含め、いろいろな経過を通して今日に至っています。アメリカでも大学に行き、神学校に通いました。学位を取り、按手礼を受けて正式な牧師になりました。按手礼があると、結婚式のサインもできるし、牧師として認められるのです。フ



教室でのおにぎりパーティ



教室のようす



妻の聡美と

ロリダで三十年以上、教会の働きに従事してきました。今は年金生活ですが、教会の働きと同時に、小学校や中学校、高校で補助教員として働いています。アメリカの大学を卒業したので、そのように教員の仕事もできるのです。特に障がいをもつ子どもたちの支援にはやりがいを感じています。食事や着替えまで手伝うこともありますが、彼らの笑顔に励まされます。

信仰をもって生きるとは

私は変わり者と言われる。それは聖書や社会への視点によつてです。例えば、

「信仰があれば山が動く」と言われますが、私は神様を信じていますが、山が動いたのを見たことがありません。そういうことを日本語教室に来ている生徒たちにも言うんです。するとみんなシーンとしちゃう。私は、信仰があっても悲しみや困難は避けられない、と話します。私のような個人のレベルで、英語も満足にできなかったような日本人でも、アメリカに来て、大学を出て、アメリカ人のために伝道する、そういう奇跡も起こるけれども、それと同時に、その神様を信じていても、歴史を見れば、痛ましい戦争や虐殺や、国が滅びるような出来事も起こっている。だから、信じて山が動く、ということをやつてくるとか、金持ちになる、苦労知らずの生活ができるのか、そういう短絡的な意味で受け取るとしたら、とん

でもない話になってしまう。聖書の言葉やイエス様の言葉を一部分だけ抜き出して解釈したり利用したりすることは本当に危険だと思います。そんなもんじゃありません。信仰をもって生き抜くことは大変なことです。困難も悩みも迷いもある、その人生で、いよいよ死ぬ時に、本当にどこへ行くのかと苦しむ中で、その時に、やがてイエス様の顔を見られると、そのことに希望をもっていく。死の間際（まぎわ）にイエス様の顔を見られるという希望がある。それが信仰の力だと思っています。

好きな聖書箇所というのは決められません。「マルタとマリア」の話は日本語教室でもすることがあります。ルカによる福音書一〇章に出てくる姉妹の話です。イエス様が訪ねて来られた時、マルタは一生懸命おもてなしをしていたけれど、妹のマリアはイエス様の足元に座って話を聞いていた。マルタが「マリアにも手伝わせてください」と言ったら、イエス様は「マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」とおっしゃった。私は生徒たちにこう言うんです。「あなたたち

もそれぞれ一生懸命やっている。人と比べることではなく、何が一番大事かを見失わないでほしい」と。人を見下したり、比べたりするんじゃないくて、自分のベストを尽くすことが大事なんだと。

それから、ダニエル書の話もよくします。唯一の神様を信じるシャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人が、王の作った金の像を拝まなかったことで火の炉に投げ込まれる場面（ダニエル書三章）です。彼らはこう言ったんです。「私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。しかし、たとえ神様が私たちを救い出してくださなくても、私たちは王が立てた金の像を拝むことはしません」と。これが本當の信仰だと思うんです。信じていけば必ず助かる、うまくいく、そういう都合のいい信仰じゃない。たとえ助けられなくても、信じ続ける。それが信仰の本質だと私は思っています。

神様に生かされて

い。誠実に、自分の思いを伝えることが、魂に響くメッセージになると信じています。

妻の聡美とは日本の教会で出会って結婚しました。彼女は優秀な人で、日本では大きな企業で働いて、アメリカに来てからも保険会社のIT部門で働いていました。経済的にも家族を支えてくれました。今は教会でピアノリストまたオルガンリストとしてよく奉仕をしていますし、日本語教室の運営も彼女の助けなくしてはやっていけません。

人生には苦労がつきものです。アメリカに来てからも差別を受ける体験や、英語もままならない中での勉学、生活など、困難は多くありました。また、何度も仕事を失いましたが、いつも、ぎりぎりのところで新しい仕事が見つかりました。神様がそのように、私のような者を、アメリカの地で生かしてきてくださったことは本当に恵みです。



2025年の帰国時に 長年の友人たちと

や後輩と会うのを楽しみにしています。若い頃、一緒に信仰を育んだ仲間の中から救世軍士官や牧師になった人、社会福祉の働きを長年している人もいます。この年になって、仲間と話すテーマは死ということになつてきましたが、最後にまだ何かやることがあるようにも思っています。

今、日本語教室という形で、昔から思い描いていた夢が実現していることを感謝しています。三十六年間、ほかの仕事しながらも、ミッションパスターを続けてこられたというのは幸せなことです。今は、どんな人でも、貧しい人も金持ちも、だれでもイエス様のことを必要としている人はいらつしゃいと、そういう気持ちで伝道をしています。人々が集まり、互いに支え合い、信仰にふれる場所。それが私の目指す教会の姿です。



世界をみつめて

〈ジョージア〉ウクライナ難民支援に対する受賞

ジョージアの救世軍は、ウクライナ難民支援における功績が認められ、聖パンテレイモン勲章を授与されました。ウクライナ政府から授与されるこの勲章は、ウクライナ国民の自由と独立の精神に貢献し、医療や人道的活動をした個人や組織に対するものです。ジョージアの救世軍は他の 10 組織と共に選出され、7 月 28 日にキーウで授賞式がおこなわれました。



活動のようす クーボンの配布



子どもたちのためのキッズ・クラブ

ジョージアの救世軍は、戦争が始まって以来、ウクライナ避難民のジョージアへの一時的移住のため、様々な人道プロジェクトを実施してきました。生活必需品、衣類、食料の配布を実施し、バトウミ市では毎日 120 人ほどに温かい食事を提供できる食堂をオープンしました。子どもたちのためには、学用品と衣料品のクーポンを配布し、日常的に子どもたちが食事をしたりグループ活動に参加したりする放課後プログラムを継続しています。青少年向けのウィンターキャンプとサマーキャンプもおこないました。

このような活動により、ジョージア在住のウクライナ人の推薦を受け、救世軍はジョージア国内からは唯一、この賞に選出されました。救世軍東ヨーロッパ軍国（ブルガリア、ジョージア、モルドバ、ルーマニア、ウクライナから成る）の司令官は、「救世軍の活動がこのように認められたことは大変光栄です。これは、避難民の人々に尊厳と希望をもって奉仕するという、神から与えられた使命を実行したことの証しです。ジョージアの活動が地域社会の希望として輝き続けることができるよう、私たちと一緒に祈ってください」と語っています。

〈ヨーロッパ〉青年大会「EYE」の開催

8 月 7 ～ 10 日、オランダでヨーロッパ地域の救世軍のユースイベントがおこなわれ、22 カ国から 700 人余りの若者たちが集まり、礼拝と賛美、聖書のメッセージを聞く時をもちました。また、スポーツやアートを通じて互いに交流し、自由な雰囲気の中で国籍や言語を超えて友情を育みました。「EYE」(目)というタイトルが示すように、どのような時にも神を見上げることがテーマでした。ヨーロッパでも神は働いておられ、神を仰ぎ見、信仰をもって生きる世代が立ち上がっていることが感じられる集会となりました。



☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆ (子ども向け紙面)

左の QR コードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます！ 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください！



救世軍とは？ What is the Salvation Army?



救世軍は、世界 134 の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865 年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められました。日本では 1895 (明治 28) 年に英国から士官 (伝道者) たちが来日して救世軍の働きが始まりました。日本人最初の救世軍士官となったのは山室軍平で、その妻 機恵子は、廃娼運動で救出された女性たちの自立支援、結核療養所設立のための募金など、山室と共に、神と人のために力を尽くして活動しました。

現在、日本の救世軍では、二つの女性自立支援施設を運営しています。また、毎年 10 月は救世軍では特別に女性の働きを覚えて祈り、海外支援のための「きずな献金」を献げる時をもちます。今年の「きずな献金」は台湾の救世軍の伝道所での楽器購入プロジェクト「ワンダフル・メロディ」のために用いられます。

世界の救世軍の指導者

〈ご案内〉

リンドン・バッキンガム大將 及び
ブロンウィン・バッキンガム中將

11 月来日



救世軍 全国大会 2025

—新しい地平線へ—

どうぞお集いください！

11/22 (土) 午後 2 時 入場無料 全席自由 事前申込み制
バンドレイジング・チャリティー・コンサート

於：東京都 中央区立日本橋公会堂

コンサートご入場には予め QR コードからのお申込みが必要です。定員になりましたら締め切らせていただきますのでお早目にお申し込みください。

11/23 (日) 午前 10 時 入場自由
大会聖別会 (礼拝)

於：東京都千代田区 日本教育会館9階 喜山

救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版 / 毎月 1 日、広報版 / 奇数月 15 日
定 価 福音版 / 1 部 40 円、広報版 / 1 部 100 円
(税込) クリスマス特集号 (12 月 1 日号) / 1 部 100 円
振 替 00180 - 5 - 4400
発行兼 救 世 軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 03-3237-0881 (代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています © 共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。

- ・私の近くの救世軍を紹介してください。
- ・キリスト教についてもっと知りたいです。
- ・『ときのこえ』の購読を申し込みます。
- ・相談を希望します。